

校内書き初め展



令和元年度
杉並区立松溪中学校

松溪だより

SHOU
KEI
1月号



<http://www.suginami-school.ed.jp/shoukeichu/>

教育目標

- 自学・自立
- 思いやり・感謝
- 鍛錬

マイナスの感情を、自分へのプレゼントとする

校長 赤荻 千恵子

－「元日の朝、晴れて風無し」－

令和2年のお正月は、穏やかに晴れ渡り、良い年を予感させる気持ちの良い幕開けとなりました。

1年生は下町への校外学習、2年生は移動教室、3年生は進路決定と、それぞれまとめの学期を迎えました。心を整え納得のいく日々を過ごしましょう。

保護者・地域の皆様、本年も松溪中学校へのご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

－箱根駅伝選手のコメントから－

さて、伝統の箱根駅伝を走った3人の選手を紹介しながら、「悔しい」という言葉について考えてみたいと思います。

1人目は、花の2区、東京国際大学の4年生伊藤選手です。デッドヒートの結果、惜しくも東洋大学相沢選手に抜かれて2位になったのですが、試合後のインタビューで「負けた方が、自分は強くなると思っているので」と答えました。何度も悔しい思いを味わったのだなと思いました。「これを機に世界で戦えるランナーになろうと思う」と語りました。

2人目は、やはり2区を走った、駒澤大学の山下選手です。今回はタイムが伸びず、「悔しいです。もう1回走りたいです。次からどこかでがんばります」と話しました。悔しさは、これからの人生で返す(生かす)という前向きな言葉に胸が熱くなりました。

さて、3人目は、4区を走った青山学院大学の吉田選手です。これまで毎年補欠の1番目として登録されながらも出ることは叶わなかったそうです。それでも、腐らず、逃げず、黙々と努力を続け、競技人生のラストランは、見事、区間新の1位でした。彼は、インタビューで「4年生の最後に、たった1時間ですけど、本当に走れて良かったなと思いました」と話しました。今まで、どれだけの時間を走ってきたことでしょうか。

－「悔しい」とどう向き合うか－

3選手に共通していることは、「悔しい」というマイナスの気持ちを、大切に自分の力にしていること、次の自分の挑戦の糧にしていることです。

思ったような評価が得られなくても、不安や怒りに押しつぶされなくて、駅伝出場を目標に、ひたすら練習に励んだ精神力に頭が下がります。

また、吉田選手は「自分に何ができるかと言えば努力すること。ないものをねだるよりも、あるものをうまく生かそうと思ってここまで来ました」とも言っています。1年という期間を定めて、過酷な練習に励みました。「努力」が自分の強みだと理解し、それを疑わず、継続してやりきること、自分を信じたからこそできたことです。未来はだれにも分からないのだから、可能性に満ちた未来を信じる強さをもつことから始めたいと思いました。

－「悔しい」は、自分へのプレゼント－

「悔しい」という、一見マイナスに思える感情を、「人生を良い方向へ導く転機を作るもの」とするためには、「悔しい」を心の底から味わうことが決め手となりそうです。

運が悪かったとか、こうじゃなきゃ良かったのとか、何かのせいにして、悔しさから目をそらしたり、自分にとって嫌な感情をなかったものにしたりすることはもったいないことです。

一方、一生懸命取り組んできた自分を否定せず、認めることもまた大切です。「悔しい」という感情は、頑張った人への、大きなプレゼントだからです。

そのためにも、長い時間で物事をとらえる視点が大事になってきます。今だけにとらわれることなく、これまでの自分の頑張りを冷静に見つめ、未来の自分はこうありたいという目標をもつことです。

挑戦しなくては、悔しくもなれません。自分におけるあらゆる感情を味方につけて、ひたむきに目標に向かうことです。プラスの感情もマイナスの感情に、自分の都合で色を付けてしまうのでなく、ありのままに受け止めることからやってみてほしいと思います。そこに思いもかけない解決や飛躍の糸口があるのかもしれないと考えるからです。

全国学力・学習状況調査（第3学年対象）

正答率：%

	国語	数学	英語
本校	78	64	67
東京都	74	62	59
全国	72.8	59.8	56

東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（第2学年対象）

正答率：%

		思考・判断・表現 国：話す・聞く 英：外国語表現	技能 国語：書く 英語：外国語理解	知識・理解 国語：言語	読む	教科の合計
国語	本校	79.8	61.3	78	84	78.1
	東京都	74.8	59	68.9	78.9	71.7
社会	本校	51	69.1	44.3		55.3
	東京都	48.5	61.5	40.9		50.9
数学	本校	39.1	67.5	65.2		59.5
	東京都	29.9	59.7	63.6		52.9
理科	本校	46.7	62.1	49.8		51.9
	東京都	43.5	60.1	47.3		49.3
英語	本校	53.9	67	71		64.7
	東京都	40.8	61.9	59		55.9

杉並区「特定の課題に対する調査」 正答率：%

	教科	国語	数学	理科	英語
1年	本校	68.7	59.1	64.3	
	杉並区	66.9	58.2	62.1	
2年	本校	72.3	54.5	60.8	64.8
	杉並区	68.5	55.3	58	60.9
3年	本校	57.9	52.4	57	53.5
	杉並区	58.1	57.1	59.4	51.7

東京都児童・生徒体力・運動能力等調査結果

	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横跳び	20M シャトルラン	50M走	立ち幅跳び	ハンドボール投げ	体力合計点	
1年男子	本校	21.6	22.6	38.2	47.5	72.5	8.8	176	16.4	31.1
	東京都	23.3	24.1	38.5	49.2	67.5	8.6	178.6	17.4	32.7
	全国	24.6	24.5	40.3	49.5	73.1	8.4	181	18.7	35.5
2年男子	本校	28.6	26	42	53	88.2	7.9	189.9	18	40.9
	東京都	28.5	27	42.4	52.4	80.8	8	194.8	20.4	40.9
	全国	30.1	28.4	44	53.1	90.3	7.8	197.7	21.5	44.7
3年男子	本校	31.8	25.7	44.9	54.9	93.8	7.7	200.8	20.2	46.2
	東京都	33.4	29.4	45.7	55.1	89.1	7.6	209.5	22.9	47.8
	全国	35.4	30.5	47.1	56.1	97.7	7.4	212.4	24.1	51.6
1年女子	本校	21.9	21.9	45.7	47.2	56.7	9	167.2	11.7	47
	東京都	21.6	21.9	43	46.2	51.4	9.1	165.2	11.1	44.2
	全国	21.9	21.1	43.7	45.5	53.4	9	165	11.9	45.4
2年女子	本校	23.4	23.3	45.8	49.4	63.5	8.6	169.6	12.1	51.3
	東京都	23.6	23.5	46.1	48.1	59.1	8.7	171.3	12.7	50.1
	全国	24.4	23.7	46.6	47	278.4	61.9	8.7	170.7	13.5
3年女子	本校	24.6	27.6	48.7	51.2	62.1	8.6	167.2	13.7	53.8
	東京都	24.8	25.3	47.2	48.1	57.3	8.7	171.4	13.5	51.7
	全国	25.5	24.8	48.4	48	60.7	8.6	174.8	14.4	54

○学力を向上させるための具体的な方策

(国語)漢字の小テスト、文法の練習問題、資料集や辞書の活用を通して、基礎的な「言語」の力を育てる。昨年度に引き続き、様々な文章の型に合わせて書くことや、内容や構成のメモを活用する指導を通して「書く」力を育てる。また、読み取りの単元でも話し合いや自分の意見を書く活動を積極的に取り入れ、能動的に学ぶ授業を行う。

(社会)テーマごとにグループワークを設定し、自分の考えを表現する機会を設けることで、思考力や判断力を伸ばす。覚える内容が多いという意見に対しては、小テストを単元ごとに行い、知識の定着を図っていく。地理ではグラフを活用、歴史では年表を作成、公民では時事問題に注目など科目による家庭学習の重点を徹底する。また、問題演習を複数回行うよう指導し、インプットだけでなく、アウトプットを重視する。

(数学)四則混合計算と方程式、比例の式を求める問題について今後の授業でスパイラルしながら復習し、授業を進めていく。基礎の確認プリントと発展的な深く考えるプリントを併用し、基本的な学力の定着と数学的思考力を高める。

(理科)身近な自然現象を取り上げ、生活の中にある理科を感じる学習の導入を行う。また、自然の事物現象を質的量的な関係で捉え、測定結果を表やグラフを活用して比較したり関連付けたりする「実験・観察」を中心とした指導の充実を図る。さらに、観察や実験の結果を考察することにより、深い学びへと繋げていく。

(英語)学力向上のために、①導入の工夫をし、目標や評価を明確にする。②復習を繰り返し行い、基礎事項を定着させる。③新出事項を使った英作文や3文英作文など、書く活動を増やす。④レベルに合わせて与える課題の工夫をする。(宿題の指示とチェック)⑤発話の機会を増やし、自信をもって英語表現ができるようにペア、グループの作り方を工夫する。